

清代八股文における破題・承題の 作成法について (3)

On the “Opening the Topic” and “Receiving the Topic” Sections
of the Eight-Legged Essay (3)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

(viii) 『芹宮新譜』

鄭一鵬の『芹宮新譜』（雍正三年〔一七二五〕序）では、まず破題の作成法を述べ、続いてどのような立場から破題を書くかに言及する。

①

破 [題]・承題を論ず

破題は通篇の眼目と爲す。[題] 意を破く^とを上と爲し、[題] 面を破くは之に次す。宜しく簡なるべし、宜しく繁なるべからず。宜しく曲⁽¹⁾なるべし、宜しく直なるべからず。但だ簡要なれば氣 足り、曲要なれば意 醒む。雷同の句は宜しく避くべし、通套（慣用的な表現）の言は必ず除く。……[承題についての説明] ……此れ入彀（合格）の第一關と爲す（『芹宮新譜』上巻・一葉・「論破承題」条）。

(1) 張商霖の『夢雲軒管見錄』（同治十年〔一八七一〕刊：各頁の柱と封面とは『雲路指南』）は、「曲」をつぎのように説明する。

天上に文曲星有るも、文直星無し。故に「詞 巧みならんと欲す」と曰う。「巧」は即ち「曲」の謂なり。山 峰巒（連なった峰々）無ければ、則ち峨嵋（高くそびえた様子）秀を失う。水 波瀾（波濤）無ければ、則ち散漫平直にして、毫も趣を生ずる無し。[これらは] 何ぞ観作に足らん。文も亦た然り。直頭（融通のきかない石頭）の布袋（和尚）なるが若きは、何の文理を成さん（『夢雲軒管見錄』（『雲路指南』）巻七・制藝總論・「曲」条・四葉）。

〔破題・承題について〕

破題は、全体の眼目である。題意を解き明かすのが最もよい。題面を解き明かすのはそれに次ぐ。簡潔であって、繁雜にならないようにすべきである。また、巧み（曲）であって、単調にならないようにすべきである。簡要（直截的に要点をおさえる）であれば氣が満ち、曲要（巧みに要点をおさえる）であれば意味がはっきりする。同じような表現は避けるべきである。慣用的な表現は必ず除く。これが合格の最初の要点である、と鄭一鵬はいう。

②

口氣を得るを要す

今人は但だ起講より以下には〔題目の〕描神畫吻（精神や口ぶりを描写）するを要^{もと}むを知るも、破題に便ち口氣を体貼（付け加える）するを要むを知らず。「子路問、聞斯行諸（子路 問う、聞かば斯^{すなわ}ち諸を行なわんか）」（『論語』先進）の破〔題〕に「賢者志在必行、特舉所聞相質焉（賢者 志は必ず行うに在れば、特に聞く所を舉げて相い質す）」と云い、「冉有問、聞斯行諸（冉有 問う、聞かば斯^{すなわ}ち諸を行なわんか）」（『論語』先進）の破〔題〕に「賢者志不在行、姑卽所聞爲問焉（賢者 志は行うに在らざれば、姑く聞く所に即きて問を爲す）」と云うが如きは、蓋し兩人 問いし時、是れ兩般の意思・兩般の聲口あり。「〔冉有の〕退」と「〔子路の〕兼人^①」との光景 此れに即して呈露す。破〔題〕の首句に于いて「志在」・「特以（舉）」字を用い、次句は「志不在」・「姑卽」字を用う。〔このようにすると〕下情（気持ちを表現する）に當りて便ち紙上に宛然（はっきりしたよう）たるを致す、故に前輩 文を作るに獨り「看題」と云わず、而して直ちに「聽題」と云うなり。『四書』中 此の如き類^{きわめ} 儘て多し。細心に體認せざる可からず（『芹宮新譜』上卷・三葉・「要得口氣」条）。

①曰、求也退、故進之。由也兼人、故退之（〔子路と冉有の同じ質問に対して孔子が異なった回答をしたことに戸惑った公西華に孔子は答えて〕曰く、求（冉有）や退く（控えめ）、故に之を進む（前に出させる）。由（子路）や人を兼ね（出すぎ）、故に之を退く（『論語』先進）。

〔会話体が必要なこと〕

今の人は、起講より以下は題目の気持ちや口ぶりを描写することが求められることは理解していても、破題においても会話口調を付け加えることを知らないという。

そして、会話体を用いた用例として、『論語』先進に、子路と冉有とが同じく「聞すなわかば斯すなわち諸を行なわんか」（『論語』先進）と質問した箇所を題目としたものを、

◎賢者志在必行、特舉所聞相質焉（賢者 志は必ず行うに在れば、特に聞く所を擧げて相い質す）

◎賢者志不在行、姑卽所聞爲問焉（賢者 志は行うに在らざれば、姑く聞く所に即きて問を爲す）

と破いた破題を提示する。この破題は、子路と冉有ふたりの考えや口ぶりをはっきりさせて、冉有の「退（控えめ）」と子路の「兼人（出すぎ）」とのありさまを示しているからだとする。

まず、子路の質問の句については劉嗣固（字は正夫。江西弋陽の人）の『纂補四書大全』（康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂）の解説を見ると、まず子路の「聞すなわかば斯すなわち之（諸）を行なわんか」の発言の意味は何かと問いを立て、

問う、「子路 問う、聞すなわかば斯すなわち諸を行なわんか」の意は何ぞや、と。曰く、子路の意は速やかに行なうに在るなり。故に之を問い以て其の當否を質す、と（『纂補四書大全』下論・卷之九・先進・十九葉・「子路章」条）。

と説明する。子路は「速やかに行なう」ことを考えていたとするのである。

ここで引用される破題もこのように理解し、「志は必ず行うに在れば」とし、「聞く所を擧げ」て質問して破題を書いているのである。

つづいて冉有の質問の句についても『纂補四書大全』の解説を見ると、冉有の「聞かば斯^{すなわ}ち諸を行なわんか」の発言の意味は何かと問いを立て、

問う、「求（冉有） 問う、聞かば斯^{すなわ}ち之^{ママ}（諸）を行なわんか」の意は何ぞや、と。曰く、冉求の意は速やかに行なう可からざるに在るなり。故に之を問う、と（『纂補四書大全』下論・卷之九・先進・二十葉・「子路章」条）。と説明する。冉有は「速やかに行なう可からず」と考えていたとする。

ここで引用される破題もこのように理解し、「志は行うに在らざれば」とし、「姑く聞く所に即き」で質問して破題を書いているのである。

この用例のようにすると、気持ちを表現するにあたり、紙上にはっきりとした姿を示すことができる。したがって、先輩たちはの八股文を作成するにあたって「看題（題目を見る）」といわず、「聴題（題目を聴く）」というのである。『四書』にはこうした箇所が多い。注意深く理解しなければならない、と鄭一鵬はいう。

③

破は貼切なるを要す

「南容三復白圭（南容 白圭〔の詩〕を三復す）」（『論語』先進）の破〔題〕に「不敢玷於言者、其人如玉矣（敢て言に玷^かけざる者は、其の人 玉の如し）」と云う。「出入相友（出入 相い友とす）」（『孟子』滕文公上）の破〔題〕に「同人于野敦、友誼於田間矣（同人 野に于いて敦く、友誼 田に於いて聞^{へだ}つ）」と云う。此れ『詩』を用う^①・『易』を用いる^②に似たり。此の如く天然（自然）なれば、此れ雅なる「切^②」と爲すなり。 張樸園（張榕端：字は子大、一字は樸園。河南磁州の人。清・康熙十五年丙辰科（一六七六）二甲三十七名の進士）の「鼻之于臭也（鼻の臭におけるや）」（『孟子』盡心下）の破〔題〕に「氣與氣相感、而鼻有專司矣（氣と氣と相い感ず、鼻 專司有ればなり）」と云う。此れ確たる「切」と爲す。 宋嵩南（宋衡：江南廬江の人。清・康熙二十四年乙丑科（一六八五）二甲十七名の進士）の「大孝終身慕父母（大孝は終身 父母を慕う）」（『孟子』萬章上）の破〔題〕

に「大孝之慕親，終身一孩提也^③（大孝の親を慕うは，終身一の孩提なればなり）」と云う。此れ眞（まごころ）からの「切」と爲す。之を總じて文章の妙は一の「切」の字もて之を盡すなり。震川（歸有光：字は熙甫，号は震川。江蘇崑山の人。正徳元年（一五〇七）～隆慶五年（一五七一）。嘉靖四十四年乙丑科（一五六五）三甲一百四十二名の進士）は，切ならざる者を爲すは，陳言（陳腐な言葉）と爲す，とす。毎に俗手の文する所を見るに，未だ全幅^{すべて}を看ず。即ち一の破題に浮浪（輕薄）不根（荒唐）の語あれば，已に人をして觸目（はつきりと）生厭（嫌気が差す）せしむ。故に余 破題に於いて獨り一の「切」字を標す。其の「雅切」と爲す者は，成句を運用し，是れ一に是れ二に，巧みに題と合するを謂うなり。其の「確切」と爲す者は，意を以て題に「適」切にし問句をして通用するを得ざらしむ（疑問を起こさせない）を謂うなり。其の「眞切」と爲す者は，語性靈に根づき人をして心脾^{こころ}に沁入（入り込む）せしむるを謂うなり。即ち一の破 定まりて，草草とせざるなり（『芹宮新譜』上卷・四葉・「破要貼切」条）。

①『詩經』大雅・抑に「白圭之玷，尚可磨也，斯言之玷，不可爲也（白圭の玷^かくるは，尙お磨く可し，斯言の玷^{おき}くるは，爲む可からず）。

②『易經』同人の卦辭に「同人于野，亨。利涉大川。利君子貞（人と同じくするに

✓ (2) 張商霖の『夢雲軒管見錄』（同治十年（一八七一）刊：各頁の柱と封面とは『雲路指南』）は，「切」をつぎのように説明する。

凡そ一題[目]には必ず一題[目]の眞の血脈(事物の脈絡)・眞の精神・眞の面目有り。[そうしたものを] 移歩(動かし) 換影(内容を変化させる) すれば，略差(ほぼ) 便ち非となる。故に一題[目]の手に到れば，必須らく詳審(詳細に審察する) 確當(正確) にし，口口に咬著(味わう) し，稍も模糊有り・稍も間隔有らしめず。方に題[目]の事に於いて負く無し。嘗て見るに初學 題[目]の相い似たる者有り，或いは題中の數字の相い同じき者有るに遇えば，並びに題竅(題目のキーポイント)の肖たる肖たらずを思わず，輒ち其の句調を抄襲す。是れ安くんぞ能く題[目]に切ならんや。夫れ切ならざる者は陳言と爲す。韓子(韓愈) 云う，「陳言を務めて去く(陳腐な言葉をできるだけ取り除く)」(「答李翊書」と。學者 當に深く警とすべき所なり(『夢雲軒管見錄』卷七・制藝總論・「切」条・一葉)。

野に于いてす、^{とお}享る。大川を渉るに利あり。君子の貞に利あり)」。

③題目の截去された上文は「人少則慕父母，知好色則慕少艾，有妻子則慕妻子，仕則慕君，不得於君則熱中，大孝終身慕父母（人 ^{わか}少ければ則ち父母を慕い，好色を知れば則ち少艾を慕い，妻子有れば則ち妻子を慕い，仕うれば則ち君を慕い，君に得ざれば則ち熱中（あせて気をもむ）す。大孝は終身 父母を慕う）」とある。

〔破題は隠当・適切（貼切）であること〕

「南容三復白圭（南容 白圭〔の詩〕を三復す）」（『論語』先進）の題目を、『詩經』を踏まえて「不敢玷於言者，其人如玉矣（敢て言に^か玷けざる者は，其の人 玉の如し）」と破き，「出入相友（出入 相い友とす）」（『孟子』滕文公上）の題目を『易經』を踏まえて「同人于野敦，友誼於田間矣（同人 野に于いて敦く，友誼 田に於いて間つ）」と破くのは，引用の仕方が自然で雅なる「切」であるという。

また，「鼻之于臭也（鼻の臭におけるや）」（『孟子』盡心下）の題目を「氣與氣相感，而鼻有專司矣（氣と氣と相い感ず，鼻 專司有ればなり）」と張樸園が破いているのは，「確切」であるとする。

そもそも汪鯉翔の『四書題鏡』（乾隆三十五年〔一七七〇〕刊）では，この句を，鼻は獨り正中に位し，陽は呼（息をはく）し，陰は吸（息をすう）して，水火 互いに用ゆ。鼻は體を隆高（突起）に^{さだ}宅め，外は中淵に峙し，「山澤 氣を通ずる」（『易』說卦）なり。其の體爲るや實，而して其の用は則ち虚なり。其の形爲るや静，而して其の神は則ち動なり。是れ形を以て感ぜず，神を以て感ずるなり，情を以て投ぜず，氣を以て投ずるなり。故に巽に臭爲るの象有り（『易』說卦「巽……爲臭……」）。而して鼻は即ち臭と接す。「周〔人〕 臭を尚とぶ」（『禮記』郊特牲）の文有り，而して鼻は適たま臭と期す。臭 未だ來らずして，鼻 之に趨くが若し。臭 已に去りて，鼻 之を戀するが若し。臭 物に隨いて^{あらわ}呈れ，鼻 之を招くが若し。臭 時に隨いて變じ，鼻 之を迎えるが若し。〔鼻と臭との二者は〕自ず

から^す捨つる能わざる者有るは、何ぞや（『四書題鏡』下孟・卷八・盡心下・十二葉・「鼻之句」条）。

と解説する。この句についての八股文を書く時は、鼻は、「其の形爲るや静、而して其の神は則ち動なり。是れ形を以て感ぜず、神を以て感ずるなり、情を以て投ぜず、氣を以て投ずるなり」であることを理解しておくようにというのである。

ここで引用される破題も、『四書題鏡』の理解のように、鼻が「氣」でもって感じあうことを述べる。これは疑問の起こらない確かなことである。そこから、この破題は、「確切」であるというのである。

さらに、鄭一鵬は、「大孝終身慕父母（大孝は終身 父母を慕う）」（『孟子』萬章上）の題目を「大孝之慕親，終身一孩提也（大孝の親を慕うは，終身一の孩提なればなり）」と宋衡が破いたものを「真切」の用例として引用する。

『纂補四書大全』では、この題目の「大孝」を「天性の厚くして、孺慕の心の終始改めざる者なり」と説明する。

問う、「慕少艾（少艾を慕う）」・「慕妻子（妻子を慕う）」・「慕君（君を慕う）」者は、固より之れ有り。然らば此れを慕うの時、豈に必ず皆な父母を忘れんか、と。曰く、必ずしも皆な父母を忘れざるなり。只だ是れ心 此に在りて、父母を慕うの心 薄く、^{わか}少き時の時時刻刻と心を専にして、父母の身上に在りて孺慕（幼子が親を慕う：『禮記』檀弓下）の光景を打點（ふるい起こす）に似ず、と。○問う、「大孝終身慕父母（大孝は終身 父母を慕う）」とは何ぞや、と。曰く、此れ則ち天性の厚くして、孺慕（『禮記』檀弓下）の心の終始改めざる者なり。故に「大孝」と爲す、と（『纂補四書大全』下孟・卷之十八・萬章章句上・四葉・「人少則慕父母」条）。

この宋衡の破題も同じように理解して書かれている。「大孝」が親を慕うのは、幼子が親を慕う（孺慕）心を終身持ち続けているからだという。鄭一鵬によれば、このような書き方が、誰でも適切であると納得できる解き方（「真切」）であるとするのである。

以上要するに、文の妙は「切」字に尽きる。歸有光がいうように、「切」の表現を行なっていないものは、陳言（陳腐な言葉）となるのである。凡人の書いた八股文を見る時、すべては読まなくてよい。破題の部分に輕薄・出拠のはっきりしない語があれば、はっきりと嫌悪感をあたえる文であることが分かるからだという。そのため、鄭一鵬は、破題を書くにあたって「切」であることが必要であるとするのである。

そして、鄭一鵬は、「雅切」・「確切」・「真切」をつぎのように説明する。

「雅切」は、古典を用いてたくみに題目の意味と合致させるもの。

「確切」は、疑問を起こさせず、完全に適切なもの。

「真切」は、言葉が性情に基づき人の心根に入り込ませるもの。

このような「切」に基づいて破題を定めると、ばたばたしなくてすむという。

④

破は隽永⁽³⁾なるを要す

王耘渠（王汝驤：字は雲衢・耘渠。金壇の人。貢生。『制義叢話』では雍正期に分類する。『明文治』を編輯したことで知られる）先生の「當暑衫絺綌（暑に當りては衫にして絺綌もてす）」（『論語』郷黨）の破〔題〕に「記聖人當暑之服，其外則猶夫人也（聖人の暑に當る^{あた}の服を記し，其の外〔出する時〕は則ち猶お夫人（衆人）のごときなり）」と云う。次句 下に逼りて妙なり。 又た「寔不能容（寔に容るること能わず）」（『大學』傳

(3)『斯文規範』によると、「隽永」とは、「味有りて長き」の意味であるという。

昔、蒯通 書を著して『隽永』と號す（『漢書』蒯通傳）。其の説 味有りて長きを言うなり。則ち凡そ文中の辭句の味有りて長き者は、俱に隽永に屬す。以上の三者（淡遠・起^①（趣）味・隽永）は名を異にして實は同じ（『斯文規範』卷之七・三十七葉・「一曰隽永」条）。

①淡遠：『斯文規範』に「人の常に用いる所の辭調 掃除し殆ど盡き，全く淡折を以て之を行なへば，其の中に却って自ずから深意有り，咀嚼して味有らしむるを言うなり」（『斯文規範』卷之七・三十七葉・「一曰淡遠」条）。

②起（趣）味：『斯文規範』に「文中の味有るを言うなり。然れども亦た各々同じからざる有り。淡中より趣を得る者有り，是れ淡趣と謂う。冷語を以て趣を戒むる者有り，是れ冷趣と謂う。各々同じからざる有りと雖も，之を總ずるに皆な味有るなり」（『斯文規範』卷之七・三十七葉・「一曰起（趣）味」条）。（趣）

第十章)の破[題]に「原蔽賢者之寔、彼亦無如何也(原とより賢者の「寔(まこと)に)」を蔽えば、彼れ亦た如何ともする無きなり)」と云う。「寔」字を破き、人をして頤を解かしむ(『芹宮新譜』上巻・四葉～五葉・「破要雋永」条)。

〔破題は意味深長(雋永)であること〕

「當暑袗絺綌(暑に當りては袗にして絺綌もてす)」(『論語』郷黨)の題目を「記聖人當暑之服、其外則猶夫人也(聖人の暑に當るの服を記し、其の外[出する時]は則ち猶お夫人(衆人)のごときなり)」と王汝驤は破く。この「其の外[出する時]は則ち猶お夫人(衆人)のごときなり」が、題目の部分に続く「必表而出之(必ず表して出づ)」句の意味に対している。つまり、下句に迫っていですくれた表現であるという⁽⁴⁾。

また、「寔不能容(寔に容ること能わず)」(『大學』傳第十章)句は、王文烜(字は遂升。江蘇上元の人)の『殖學齋四書大全』(雍正十一年〔一七三三〕新鐫)によると「實(寔)」字を重視すべきであると解説される。

〔節解〕此の節は是れ大臣の能く潔矩(品行方正)なると潔矩なる能わざる者との得失を言いて、因りて以て下の人君の好惡の得失を起こす……「實(寔)」字は重しと看るを要す。當に誠意に根ざし説き來るべし。彼の外に虚飾する者は、名は「能く容^い」ると雖も、實に能く容ると謂わんや……(『殖學齋四書大全』大學・七十一葉・「秦誓曰」条)。

(4) 乾隆五十一年(一七八六)刊本『國朝文鈔』上論・「當暑袗絺綌 王汝驤」条において、この八股文が引用され、王步青(字は巳山、又の字は漢階、又た罕皆とも称す。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年〔一七二三〕癸卯恩科三甲八十六名の進士)がつぎのような評を書いている。

「暑に當り」ては則ち「絺綌」せざることを有無し。「絺綌」なれば則ち「袗」せざることを有無し。異なる所の者は聖人の「必ず表して之を出づ」に在り。「之を出づ」、故に正すに其の袗を以てす。妙は「袗」字を將^もって只だ一の「表」字に當てて看る。暗に「衣」と對裏し、下句と相い呼吸す。凌空倒影し、只だ眼前の情事、此の奇觀有り王巳山(『國朝文鈔』上論・「當暑袗絺綌 王汝驤」条)。

ここで引用される、

原蔽賢者之寔、彼亦無如何也（原とより賢者の「寔（まこと）に」を蔽えば、彼れ亦た如何ともする無きなり）

という破題もやはり、「實（寔）」字に重点をおいて書かれている。そのため意味深長となっているというのである。

⑤

破は尖新なるを要す

「憲問恥（〔原〕憲 恥を問う）」（『論語』憲問）の破〔題〕に「以知恥之人而問、恥^①狷也而進乎狂矣（恥を知るの人を以て問うに、狷を恥じて進むや狂なるかな）」と云う。極めて作意有り。 呂無黨（呂葆中：浙江石門の人。康熙四十五年丙戌科（一七〇六）一甲二名の進士）の「鳳兮鳳兮（鳳や鳳や）」（『論語』微子）の破〔題〕に「能知鳳而歌之、則亦非凡鳥也（能く鳳を知りて之を歌う、則ち亦た凡鳥に非ざるなり）」と云う。「凡鳥」の二字は唐律に出づ。 又た「趋（趨）而避（辟）之（趋^{こぼし}（趨）りて之を避^さ（辟）く）」（『論語』微子）の破〔題〕に「歌鳳者復避鳳、亦終非鳳侶也（鳳を歌う者は復た鳳を避く、亦た終に鳳の侶に非ざるなり）」と云う。二つの破〔題〕は皆な尖巧（鋭く斬新できわめて精巧）にして玩^{なら}う可し。場中に能く自ら手眼（本領才識）を出す。一の妙なる破〔題〕を作れば、自から命中するの技なり。然れども出語は不的（不確實）にして、用字は不典（典雅でなく粗俗）なれば、又た塗抹^{みた}もて之を愼（愼）すに遭い易し（『芹宮新譜』上巻・五葉・「破要尖新」条）。

①題目となっている『論語』憲問・「憲問恥」条の朱注に「憲、原思名。穀、祿也。邦有道不能有爲、邦無道不能獨善、而但知食祿、皆可恥也。憲之狷介、其於邦無道穀之可恥、固知之矣。至於邦有道穀之可恥、則未必知也。故夫子因其問而并言之、以廣其志、使知所以自勉、而進於有爲也（憲は、原思の名、穀は、祿なり。邦に道有りて爲す有ること能わず、邦に道無くして獨り善くすること能わず、而して但だ

祿を食することを知るは、皆な恥ず可きなり。憲の猖介、其の邦に道無くして之を殺するの恥ず可きに於いて、固より之を知れり。邦に道有りて之を殺するの恥ず可きに至りては、則ち未だ必ずしも知らざるなり。故に夫子 其の間に因りて并せて之を言い、以て其の志を廣くし、自から勉めて、爲すこと有るに進む所以を知らしむるなり)。また、『論語』子路に「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也(子 曰く、中行を得て之に與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進んで取り、狷者は爲さざる所有り)」。

②凡鳥：「鳳」の拆字(鳳 = 凡 + 鳥)。庸才の意味。この用例は、「唐律」にはいまのところみあたらない。ただ『世說新語』簡傲篇に「嵇康與呂安善、每一相思、千里命駕。安後來、值康不在、喜出戶延之、不入。題門上作「鳳」字而去。喜不覺、猶以爲忻。故作「鳳」字、凡鳥也(嵇康と呂安と善し。毎に一たび相い思えば、千里なるも駕を命ず。[呂] 安 後に來るも、[嵇] 康の不在に値る。[嵇康の兄の嵇] 喜 戸より出で之を延くも、入らず。題して門上に「鳳」字を作りて去く。[嵇] 喜 覺らず、猶おいて忻と爲す。故さらに「鳳」字を作すは、[嵇喜が] 凡鳥(鳳 = 凡 + 鳥)なればなり)」とある。

〔破題は鋭く斬新できわめて精巧(尖新)であることを求めること〕

ここでは、「憲問恥(〔原〕 憲 恥を問う)」(『論語』憲問)の題目を「以知恥之人而問、恥狷也而進乎狂矣(恥を知るの人を以て問うに、狷を恥じて進むや狂なるかな)」と破いた破題を用例として引用する。これは、『論語』子路の「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也(子 曰く、中行を得て之に與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進んで取り、狷者は爲さざる所有り)」を踏まえて書かれている。この組み合わせが目新しく「極めて作意有り」と評価される。

また、「鳳兮鳳兮(鳳や鳳や)」(『論語』微子)の題目を「能知鳳而歌之、則亦非凡鳥也(能く鳳を知りて之を歌う、則ち亦た凡鳥に非ざるなり)」と呂葆中が破いた破題を用例として引用する。これはおそらく『世說新語』をふまえて、「鳳」字を「鳳 = 凡 + 鳥」として破題を書いたことが、「尖巧(鋭く斬新できわめて精巧)」であると評される。

さらに、「趋（趨）而避（辟）之（^{こぼし}趋（趨）りて之を避（辟）く）」（『論語』微子）の題目を「歌鳳者復避鳳，亦終非鳳侶也（鳳を歌う者は復た鳳を避く，亦た終に鳳の侶に非ざるなり）」と破いた破題が引用される。これは、朱注に「……鳳有道則見，無道則隱。接輿以比孔子，而譏其不能隱，爲德衰也……接輿蓋知尊孔子，而趣不同者也（……鳳 道有れば則ち見われ，道無ければ則ち隱る。接輿 以て孔子に比し，而して其の隱るる能わざるを譏る，徳の衰るが爲なり……接輿 蓋し孔子の尊ぶを知るも，不同に趨く者なり）」とあるのを踏まえ，鳳（孔子）を尊ぶことは理解していても，その伴侶にはなれないというのである。これも「尖巧（鋭く斬新できわめて精巧）」であると評される。

ただし，出典が不確かで，用字が典雅でなければ，低い評価になりやすいという。

⑥

破は曲折⁽⁵⁾を要す

破は，破なり。最も図圖（あいまいで明確でない）徑直（単純で直截的）を忌む。須らく曲折生動（屈折させて生き生きとさせる）すべし。題面・題意^{すべ}をして都て能く醒透（^透，通也，過也）『斯文規範』巻之五・四葉・「一曰透起」条）せしむれば，乃ち佳製と爲す。 「仲弓問子桑伯子（仲弓 子桑伯子を問う）」（『論語』雍也）の破〔題〕に「取似己之人以相証，其意不在人也（己に似たるの人を取り以て相い証す，其の意は人（子桑伯子）に在らざるなり）」と云う。 「正惟（^{ママ}唯）弟子不能學也（正に^{ママ}惟（唯）だ弟子は學ぶこと能わざるのみ）」（『論語』述而）の破〔題〕に「賢者善學聖人，反置仁聖于不論焉（賢者は善く聖人を學ぶに，反って「仁」・「聖」を論ぜざるに置くなり）」と云う。 「子貢問〔曰〕師與商也孰賢（子貢 問いて〔曰く〕，師（子張）と商（子夏）と孰れが^{まさ}賢れる）」（『論語』先進）の破〔題〕に「意中有獨賢之士，姑卽兩人以相較焉（〔子貢の〕意中に獨り賢とするの士（師：子張）有るも，姑く卽ち兩人もて以て相い較ぶ）」

と云う。三つの破〔題〕は都て^{すべ}圜圖徑直の病を犯さず（『芹宮新譜』上巻・五葉～六葉・「破要曲折」条）。

〔破題はあいまいで単純直截的な表現をいましめること〕

破題は、あいまいで単純直截的な表現をいましめる。文を屈折させて生き生きとさせるべきである。そして題面・題意をはっきりと通すことができれば、すぐれた文になるという。

「仲弓問子桑伯子（仲弓 子桑伯子を問う）」（『論語』雍也）の題目を、
取似己之人以相証、其意不在人也（己に似たるの人を取り以て相い証す、
其の意は人（子桑伯子）に在らざるなり）

と破いた用例は、『殖學齋四書大全』（論語卷之三・雍也・四十一葉・「仲弓問

✓（5）『讀書作文譜』（康熙三十一年（一六九二）刊）で唐彪は、「折」と「轉」とをつぎのように解説する。

〔轉折〕唐彪 曰く、文章 説き到りて、此の理 已に盡くとなれば、再び説き難く、拙筆 此に至りて、技 窮まるに似たり。巧みな人は、一に轉灣（発想を変える）す。便ち又た^{べつ}另に是れ一番の境界なり。〔そうすれば〕以て許多の議論を生出す可く、理境 窮まり無し。若し更に進まん^{まが}と欲せば、未だ嘗て再轉す可からずんばあらざるなり。凡そ更に一層を進め、另に一論を起こす者は、皆な「轉」の理なり。「折」に至れば則ち微かに同じからず。「折」は則ち廻環反復の致す有り。東より西に折れ、或いは又た西より東に折れる。其の間の数十句中に四五の折する者有り、三四句もて一句一折する者有り。大都（たいてい）は四五の折するの後、即ち復た折する可からず。其の往復・合離・抑揚・高下の致すは、之に較べて平叙にして波無き者なり。自然と意味 同じからざるなり。此れ「折」の理なり（『讀書作文譜』卷之七・六葉・文章諸法・「轉折」条）。『斯文規範』（康熙五十九年（一七二〇）序）は、それをつぎのように要約する。

「折」と「轉」とは相い似たり、而れども實は同じからず。「轉」は則ち此の理 已に盡き、^{べつ}另に轉じて一に灣れば、^{まが}別に是れ一番の境界あり。「折」に至れば則ち往復・合離・抑揚・高下の致す有り。之を另に轉じて一に灣る者と較べれば、自ずから別あり。此れ「折」の理なり。論は唐翼修（唐彪）に本づく（『斯文規範』卷之六・二十一葉・「一曰折筆」条）。

また、崔學古の編輯した『學海津梁』（康熙三十四年（一六九五）序）は、「折」をつぎのように説明する。

折とは、一氣奔騰の中に一折を作るなり。所謂ゆる「千里一曲」是れなり。又た一句に一折する、或いは一股に數折する者有り。要するに文勢を視て之を爲すなり（『學海津梁』卷三・四十字訣・十一葉・「轉折」条）。

子桑伯子」条)の節解で「他人に借りて自己を考証す」とこの題目を理解する解釈から書かれており、直截的な破きかたはおこなっていないものである。

「正^{ママ}惟(唯)弟子不能學也(正に惟^{ママ}(唯)だ弟子は學ぶこと能わざるのみ)」(『論語』述而)の題目を、

賢者善學聖人,反置仁聖于不論焉(賢者は善く聖人を學ぶに,反って「仁」・「聖」を論ぜざるに置くなり)

と破いた用例は、「弟子不能學(弟子は學ぶこと能わざる)」の「學」が「仁」・「聖」を指しているかのようにとれるのを、「論ぜざるに置くなり」とし、屈折させている。

「子貢問師與商也孰賢(子貢 問いて[曰く],師(子張)と商(子夏)と孰^{まさ}れが賢れる)」(『論語』先進)の題目を、

意中有獨賢之士,姑卽兩人以相較焉([子貢の]意中に獨り賢とするの士(師:子張)有るも,姑く卽ち兩人もて以て相い較ぶ)

と破いた用例は、『殖學齋四書大全』(論語卷之六・先進・十六葉・「子貢問師與商也孰賢」条)の節解で「黃合訂 曰く,子貢 合^{とうじ}下の發問の意思は,便ち子張を以て主と爲すに似たり」とあるような意見を踏まえ,單純に兩者を並列して質問したのではなく,屈折させて子張に重点を置いて書いている。

このように,ここで引用される三つの破題ともにあいまいで單純直截的な表現を行なっていないものであるというのである。

⑦

破は點晴⁽⁶⁾を要す

凡そ題[目]は,章旨・節旨の在る所有り。能く喻意(意思をあらわす)の中に于いて正意を激射(勢いよく示す)すれば,尤も人の心目をして恍然たらしむ。[それは]「草上之風(草 之に風を^{くわ}上う)」(『論語』顔淵)の破[題]に「草王于受,風爲政矣(草 受くるを王とすれば,風 政と爲すなり)」と云うが如し。 「望見馮婦(馮婦を望見す)」(『孟子』盡

心下)の破[題]に「以急欲見者、而見之望若飢矣(急を以て見んと欲する者は、之を見て望むこと飢うるが若し)」と云う。二つの破[題]は皆な喻意の内に于いて正意を點出す。并せて字眼(キーワード)を映合⁽⁷⁾し、人をして首肯せしむ(『芹宮新譜』上卷・六葉・「破要點睛」条)。

〔破題ははっきりさせること〕

すべての題目には、章旨・節旨の存在するところがある。文を書くにあたって、その正しい意味を勢いよく示せば、恍然とさせることができるとする。

「草上之風(草 之に風を^{くわ}上う)」(『論語』顔淵)句は、『四書題鏡』の説明によると、「上之」が眼目であり、小人を「草」字に、君子を「風」字に置きかえているという。

「風」は感ずるを主とし、「草」は受くるを主とす。「風」・「草」の喩(小人を「草」字に、君子を「風」字に置きかえる)、上文 已に見ゆ。題眼は「上之」の二字に在り。……此れ小人を以て「草」字に替え、君子を以て「風」字に替ゆ。小人の草を以て加えるに君子の風を以てすと云うが如し。豈に偃せざらんや。眞に融化無迹の妙を極む(『四書題鏡』下論・卷一・顔淵・十五葉・「草上句」条)。

ここで引用される破題は、

草王于受、風爲政矣(草 受くるを王とすれば、風 政と爲すなり)

✓(6)『斯文規範』によると、「點睛」はつぎのように説明される。

虚字を作る者は、既に先ず虚字の神を發出し、隨いて卽ち點題(はっきりさせる)するを言う。猶お龍を畫く者は、既に先ず龍の全身を畫き出だし、隨いて卽ち點睛するがごときなり。故に「點睛」と曰う(『斯文規範』卷之六・十九葉・「一日點睛」条)。

(7)『斯文規範』によると、「映合」はつぎのように説明される。

題[目]の正意・喩意もて俱に下面の正意を講じ映合(照らして呼応する)し、上面の喩意に着する有るを言うなり。其の實 上の「關合^①(関連呼応させる)」と異なる無し。他の所謂ゆる「雙關回映」と此の二法(映合・關合)とは名を異にして實は同じ(『斯文規範』卷之四・六葉～七葉・「一日映合」条)。

①『斯文規範』に「題[目]の正意・喩意もて俱に上面の喩意を講じ關合(照應)し、下面の正意に着する有るを言うなり」(『斯文規範』卷之四・六葉～七葉・「一日關合」条)。

とあり、小人を「草」字に、君子を「風」字に置きかえて理解するという喩をふまえて書かれている。

また、「望見馮婦（馮婦を望見す）」（『孟子』盡心下）句は、『四書題鏡』の説明によると、つぎのようにある。

……蓋し「苛政は虎よりも猛なり」（『禮記』檀弓下）。前の勸めて棠を發くは、^{ひら}①
是れ「[馮] 婦の善く虎を搏つ」なり。今、道 行なわれず、[孟子] 將に
去らんとするは、「善士と爲り」て虎を^う搏たざるなり。衆人 王の威を懼れ、
敢えて請うもの莫しは、是れ「衆 虎を^お遂い、虎 隅を負い、之に敢えて
攪るる莫き」なり。孟子を望見し、復た棠を^{ひら}發くを爲すを望む^おは、是れ[馮]
婦を望み、趨りて之を迎えるなり……（『四書題鏡』下孟・卷八・盡心下・
十一葉・「是爲節」条）。

①題目の直前は「齊饑。陳臻曰、國人皆以、夫子將復爲發棠。殆不可復（齊 饑ゆ。
陳臻 曰く、國人 皆な^{おも}以えらく、夫子 將に復た棠を發くことを爲さんとすと。
殆んど復び^{ふた}す可からざるか、と）」。

②同上。

「望見馮婦（馮婦を望見す）」は、孟子にふたたび棠の米蔵を開くように王に勧めてもらいたいの意味の喩であるというのである。

ここで引用される破題は、『四書題鏡』の解説のように、

以急欲見者、而見之望若飢矣（急を以て見んと欲する者は、之を見て望む
こと飢うるが若し）

と破き、「孟子にふたたび棠の米蔵を開くように王に勧めてもらいたい」の意味を込めている。

したがって、この二つの破題ともに喩の意味を内に込めて正しく書きだしており、人々を納得させる破題となっているとするのである。

⑧

破は高渾なるを要す

金正希（金聲：字は正希。安徽休寧の人。明・萬曆二十六年（一五九八）～明・弘光元年（一六四五）。明・崇禎元年戊辰科（一六二八）二甲七名の進士）の「天下之無道也久矣（天下の道無きや久し）」（『論語』八佾）の破〔題〕に「識時関吏，與政門論天下焉（時（時務）を識るの関吏，政門と天下を論ず）」と云う。先大父の「瑚璉也（瑚璉なり）」（『論語』公冶長）の破〔題〕に「器兼二代，品高千古矣（器 二代を兼ね，品 千古より高し）」と云う。氣象 皆な同じからず。「高渾（卓越して重厚）」の二字は大家能わざるに非ず。然らば既に搦管（執筆）して行文（文を作る）すれば，便ち此の種の境界を識らざる可からず（『芹宮新譜』上卷・六葉・「破要高渾」条）。

①『論語』公冶長・「瑚璉也」条の朱注に「器，有用之成材。夏曰瑚，商曰璉，周曰簠簋。皆宗廟盛黍稷之器，而飾以玉。器之貴重而華美者也（器は，有用の成材なり。夏には瑚と曰い，商には璉と曰い，周には簠簋と曰う。皆な宗廟の黍稷を盛るの器にして，飾るに玉を以てす。器の貴重にして華美なる者なり）」。

〔破題は卓越して重厚であること〕

破題は卓越して重厚であることが求められる。ただしその風格はそれぞれ異なる。大家は卓越して重厚なものが書けないというわけではない。したがって，文を書くにあたって，こうした境地を知るべきであるという。この例として，鄭一鵬は，金聲と鄭一鵬の祖父の破題を引用する。

まず「天下之無道也久矣（天下の道無きや久し）」（『論語』八佾）の題目であるが，『纂補四書大全』によると，「天下之無道也久矣」（『論語』）句を含む章の章旨は，つぎのように説明される。

問う此の章の旨は何ぞや。曰く，此れ聖は虚生せず。封人 聖を知り，又た天を知るを見ず（『纂補四書大全』論語・卷之五・八佾・二十六葉・「儀封人」条）。

聖人は虚しく生まれるというのではない。儀邑の封人（管理官）は，聖人を知り，さらに「天 將に夫子を以て木鐸と爲さん」と言って天のことを知ってい

ることを示しているというのである。

胡斐才（字は蓉芝。福建龍門の人。諸生）の『四書撮言大全』（乾隆二十八年（一七六三）刊）では、儀邑の封人（管理官）が、孔子に面会を求めたのは、孔子の徳に感心しただけでなく、天下のことを忘れない気持ちが孔子と感じあったからであるという。

封人（管理官）見えんを請うは、徒に〔孔子の〕徳容の盛んなるを慕うのみに非ず。其の天下を忘れざるの心は、必ず夫子と相い感ずる者有り。故に來り見え誠切なること此の如し……（『四書撮言大全』論語・卷三・三十一葉・「儀封章全旨」条）。

金聲もこのように理解する。そして、

識時閔吏、與政門論天下焉（時〔務〕を識るの閔吏、政門と天下を論ず）
 といひ、下句で、孔子と天下を論じたことに言及する。そしてそれが、重厚なものとなっているというのである。

また、「瑚璉也（瑚璉なり）」（『論語』）句は、『四書題鏡』によると、つぎのように理解すべきだという。

〔朱注でいう〕「貴重」・「華美」是れ題〔目〕の真解なり。特に今人の珍（と）うと）ぶ所と爲すのみならず、古人も亦た重んず。特に君の求むる所と爲すのみならず、神明も亦た歆く。説き得て堂皇（氣勢宏大）・名貴（めずらしい）なれば、稱題さる（『四書題鏡』上論・卷五・公冶長・二葉・「瑚璉也」条）。

朱注でいう「貴重」・「華美」がこの句の要点であるという。

さらに『四書撮言大全』では、周の宗廟の器の名称の「簠簋」といわず、夏・殷の名称である「瑚」「璉」と言ったのは、今の世の中で尊ばれるだけでなく、夏・商の二代においても重んぜられたことを示しているという。

〔解〕……「瑚璉也」は、即ち器の上より實を指して之を言う。華美の器を擧げず、宗廟の器を擧げるは、則ち特に玩好の具のみならず、實に邦國の光と爲す。本朝の器を擧げず、夏・商の器^①を擧げるは、則ち特に今世の

珍（とうと）ぶ所のみならず、且つ古人の重んずる所と爲す……（『四書撮言大全』論語・卷五・三葉・「賜也章全旨」条）。

①『論語』公冶長・「瑚璉也」条の朱注に「器、有用之成材。夏曰瑚，商曰璉，周曰簠簋。皆宗廟盛黍稷之器，而飾以玉。器之貴重而華美者也（器は，有用の成材なり。夏には瑚と曰い，商には璉と曰い，周には簠簋と曰う。皆な宗廟の黍稷を盛るの器にして，飾るに玉を以てす。器の貴重にして華美なる者なり）」。

ここで引用される破題を見ると、このように理解している。そして、そのような解釈から、

器兼二代，品高千古矣（器 二代を兼ね，品 千古より高し）
と書かれる。そうしたところが，重厚（高渾）であるというのである。

⑨

破は組織するを要す

組織は乃ち低品（下等）なり。然れども以て之を散碎（細かい）なる題に施せば，獨り宜しきこと有り。[『論語』微子の最初の]「殷有三仁（殷に三仁有り）」（『論語』微子）より[『論語』微子の最後の]「周有八士（周に八士有り）」（『論語』微子）に至るまでの破[題]に「三仁去而殷衰，八士生而周熾矣（三仁 去りて殷 衰え，八士 生じて周 熾なり）」と云う。陳介眉（陳錫嘏：字は介眉，又の字は怡庭。浙江定海の人。康熙十五年丙辰科（一六七六）二甲三十九名の進士）の「使子路問津（子路をして津を問わしむ）」より「執輿者爲誰（輿を執る者き誰と爲す）」に至る（『論語』微子）の破[題]に「濟世者窮于自濟，忘名者轉欲詢名矣（世を濟^{すく}う者は自から濟^{すく}うに窮まり，名を忘るる者は轉じて名を詢^とわんと欲す）」と云う。二つの破[題]は首尾を擒定し，却って組織して自然なり。最も入彀（合格）し易し（『芹宮新譜』上卷・六葉～七葉・「破要組織」条）。

〔破題は組織だてることを求めること〕

組織だててということは、重要とはいえない。しかし内容が細分された題目に対して組織だてを行なって破けば、筋道にかなうのである。

この例として、鄭一鵬は、『論語』微子篇ほぼ全体を題目としたものと、『論語』微子の「使子路問津焉、長沮曰、夫執輿者爲誰（子路をして津を問わしむ。長沮曰く、夫の輿を執る者は誰と爲す、と）」について書かれた破題を引用する。

まず、『論語』微子篇ほぼすべてを題目としてものであるが、朱子によると、この微子篇全体は、「此の篇は多く聖賢の出處を載す。凡そ十一章」（『四書集注』論語集注・「微子第十八」条）と説明される。

そして、ここでは全篇のほぼすべてを題目としたものを、

三仁去而殷衰、八士生而周熾矣（三仁 去りて殷 衰え、八士 生じて周 熾（さかん）なり）

と破いた破題が引用される。これは、最初の「三仁」と最後の「八士」だけを取り上げて書き、微子篇に出てくる他の聖賢には触れないものの、聖賢を殷（三仁）から周（「八士」）へと系統だてて述べているといえる。

さらに、『論語』微子の「使子路問津焉、長沮曰、夫執輿者爲誰（子路をして津を問わしむ。長沮曰く、夫の輿を執る者は誰と爲す、と）」の題目は、意味のうえからすると「使子路問津焉」句と「長沮曰、夫執輿者爲誰」句に分けられる。したがって、このふたつを組織だてて破題を書かなければならない。

『四書題鏡』によるとこの章全体はつぎのように理解すべきだとする。

此れ聖人の道を以て世を易えんと欲し、世を避ける者の知る所に非ざるを
見^{しめ}すなり。夫子 世を辟くるに忍びず。全く一つの「易」字を重んず。[長
沮・桀] 溺は「[天下 皆な亂れるに、將に] 誰と與に[變] 易せん」（朱注）
とす、[それは] 是れ天下の道無きが爲なり。然れども自私・自爲の心有
るを免れず。夫子の「易」は亦た「正に天下の道無きが爲なり」（朱注）。却っ
て「己^{おの}れ溺らす」・「己^①れ飢えしむ」（『孟子』離婁下）と意を同じくす。「誰
與（以）易」（本文）・「不與易」（本文）は、兩ながら相い呼應す。長沮
専ら孔子を譏り、桀溺 兼ねて子路を譏る。故に末節 [桀] 溺の言に反す。

亦た以て〔長〕沮に反するなり（『四書題鏡』下論・卷八・微子・三葉・「長沮章」条）。

- ①『孟子』離婁下に「孟子曰、禹・稷・顔回同道。禹思天下有溺者、由己溺之也。稷思天下有飢者、由己飢之也。是以如是其急也（孟子 曰く、禹・稷・顔回は道を同じくす。禹 天下に溺るる者有れば、^な由お己れ之を溺らすが如しと思えり。稷 天下に飢うる者有れば、^な由お己れ之を飢えしむが如しと思えり。^{ここ}是を以て是くの如く其れ急なり）」。

この章全体は、孔子が道を以て世をかえようとするが、逸民の知る所ではないことを示す。章を通じて「易」字が重要である。長沮はもっぱら孔子を譏り、桀溺は兼ねて子路を譏る。末節で孔子は桀溺の意見に反対するとともに、長沮にも反対しているとする。

『四書撮言大全』もほぼ同じように解説する。

此れ聖人の道を以て天下を濟^{すく}うの心を見すなり。一の「易」字を重んず。「誰與（以）易」（本文）・「不與易」（本文）は、兩ながら相い呼應す。、長沮 専ら夫子を譏り、桀溺 兼ねて子路を譏る。〔長〕沮の言 微にして、〔桀〕溺の言 顯なり。末節 〔桀〕溺の言に反す。亦た以て〔長〕沮に反するなり（『四書撮言大全』論語・卷十八・六葉・「長沮章全旨」条）。

孔子が道を用いて世を濟^{すく}おうとすることを示す。「易」字が重要である。長沮はもっぱら孔子を譏り、桀溺は兼ねて子路を譏る。末節で孔子は桀溺の意見に反対するとともに、長沮にも反対しているというのである。

ここで引用される破題も、こうした理解をふまえてつぎのように書かれる。

濟世者窮于自濟、忘名者轉欲詢名矣（世を濟^{すく}う者は自から濟^{すく}うに窮まり、名を忘るる者は轉じて名を詢^とわんと欲す）

上句を題目の「使子路問津焉（子路をして津を問わしむ）」句に基づき、道を以て天下を濟^{すく}いたいとの気持ちをいだきながら天下を周流している孔子が、「津を問うた」つまり道に迷ったことを示す。

題目は「夫執輿者爲誰（夫の輿を執る者は誰と爲す）」までなので、下句は

長沮が孔子をそしったことには触れない。ただ題目に「誰と爲す」とあるのを「轉じて名を詢わんと欲す」と言い換えるだけである。

また破題における代字法からすると、長沮・桀溺は「隱士」とする。しかしここでは、上句で孔子のことを「世を濟う者」としているため、それに呼応させて対にして「名を忘るる者」としている。

そして、鄭一鵬は、このふたつの破題は題目の首尾をしっかりとらえて、組織だてが自然であるとし、こうであれば、もっとも合格しやすいものになるという。

(つづく)